



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	“A Gymnastic School in Boston” の設立過程（1825～28年）：ニューイングランドにおけるドイツ体操導入の試み
Author(s)	大櫃，敬史
Citation	北海道大學教育學部紀要，75
Issue Date	1998-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/29562
Type	departmental bulletin paper
File Information	75_P181-207.pdf



“A Gymnastic School in Boston”

の設立過程(1825～28年)

— ニューイングランドにおけるドイツ体操導入の試み —

大 櫃 敬 史

The Process of the Establishment of “A Gymnastic School in Boston.”

— The First Introduction of the Jahn Gymnastics at New-England. —

Takashi OBITSU

目次

はじめに	181
I. “A Gymnastic School” の設立構想	183
1. ボストンにおける「公立体操場」設立までの動き	183
2. ヤーン (Friedrich. Ludwig. Jahn) 教授の招聘とドイツ体操の導入	187
1) ヤーン教授の招聘計画	187
2) ハーバード大学におけるドイツ体操の実施	191
II. 「ボストン公立体操場」設立請願書の起草 (1826年6月26日)	193
III. ボストン体操学校の開設 (1826年～1828年)	197
1. 公立体操場の開設 (1826年9月28日～)	197
2. 付設水泳学校の開設 (1827年7月18日～)	199
IV. ドイツ体操の推進—『A Treatise on Gymnastics, taken chiefly from the German of F. L. Jahn』(Charles Beck. 1828) 出版の意義	202
おわりに	204

はじめに

1860年に全米の大学に先駆けて、マサチューセッツ州アマースト大学において体育が正課として位置づけられ、そこにおける一定の成果が、リーランド博士によってわが国に伝達・紹介されたのは周知の事実である。明治初期、わが国にもたらされた体育は、おおよそヨーロッパから直接伝えられた系譜と、一端アメリカを経由して間接的に伝えられた系譜の二系列に大別される。

本稿ではアメリカを経てわが国に、もたらされた体育すなわち日本近代体育の原型を探るべく更に遡って初期の体育事情を検討する。

アメリカにおけるドイツ式体操の導入に関する先行研究には、Leonard, Fread E. の“A Guide to the History of Physical Education.” Chap. XXI. Philadelphia. 1923. 及び個人史研究の中でこの問題を取り上げた“Pioneers in Modern Physical Training.” See Chapters on Follen, Beck

and Lieber. New York. 1922. などが挙げられる。

一方、わが国においては、レオナルドの前掲書“A Guide to the History of Physical Education.”を翻訳・紹介した研究に、『欧米体育史』、第二編、米国編、目黒書店、昭和2年6月。がみられる。しかしこれらの研究¹⁾は、いずれもドイツ体操の導入から衰退までの概要が触れられているが、この体操導入を巡る経緯と活動の中で、いくつかの画期となった出来事—ヤーンの招聘計画、「ボストン公立体操場」設立請願書の起草、英語版『ドイツ体操に関する論文』(Charles Beck, 1828)の普及活動など—に関する実証的な検討はほとんどなされていないのが実情である。

本研究において、とりわけニューイングランド²⁾* に限定して、米国における体育の導入過程を検討する時、1826年初めケンブリッジ(米国マサチューセッツ州の都市でハーバード大学の所在地:筆者注)に、相前後して9月ボストンに開設された体操学校が存在が挙げられる。両校の設立過程を中心にドイツ体操導入の試みを詳しく分析する。

1825年頃には、すでに大学生及び一般市民を対象とした体操学校を設立し、広く体育の普及を計ろうとしていたことが窺える。更に注目すべきは、ここでの体育の指導をめぐる、ドイツから直接ヤーン(Friedrich Ludwig Jahn, 1778-1852)教授の招聘を計画していた事実が新たに判明した。

今回発見した「ヤーン招聘に関する書簡」を手がかりにしながら、彼の招聘に関する経緯について詳しく論証していく。実際には彼を招く際の条件面で折り合いがつかず、すでにアメリカに亡命をしていた三名のドイツ体操の後継者**——チャールズ・フォーレン(Charles Follen, 1796-1840)、チャールズ・ベック(Charles Beck, 1798-1866)、フランシス・リーバー(Francis Lieber, 1800-1872)——によって指導を受けることになった。

翌1826年6月、ハーバード大学の一群の教授たちの呼びかけに応じてボストン公立体操場設立委員会が組織されている。ヤーンの書簡に次いで新たに発見した同委員会起草の「公立体操場」設立請願書に基づいて、設立のねらい及び主な活動について分析を行っていく。この委員会は、自主的なメンバーで構成され、民主的な活動方針に基づいて誕生したものであって、特に評価すべき点は、体操場設立に必要な費用をボストン市民に呼びかけて寄付金として徴収したこと、市当局と交渉を行い体操場建設用地を貸借したことなどが挙げられる。

1828年、すでにJahn教授によって著されていた『体操に関する論文』(独語版, 1816年)を英語版に改めて出版し、アメリカにおける一層の普及を計った。その著書の序文を執筆したのは、アメリカにおいてドイツ体操の推進役を果たしていたベック博士その人であった。ここに至ってようやく新天地アメリカにおいてドイツ体操を普及していく際の、理論と実践の両面にわたる条件整備が完了したことになる。

この時期の体育は一貫してドイツ体操の定着化が計られた時期であったといえる。

しかしながら高邁な理念と優れた指導者に恵まれて好スタートを切ったボストン公立体操学校もわずか2年でその幕を閉じることとなった。

最後にこの様な突然の衰退を迎えることになったボストン体操学校の歴史的意義と限界について検討を加える。

* 1820年～1890年に440万人が渡米したドイツ移民は、出身地方も宗教も様々だった。ドイツ系ユダヤ人はユダヤ教の戒律のゆるい改革派を合衆国に持ち込んだが、彼らの合衆国社会への同化経験は、後にロシア系ユダヤ人のアメリカ化を助けるのに役立った。しかし「ド

イツ移民」という場合、普通は 19 世紀を通して大量にやって来たルター派のプロテスタントとカトリック教徒を指す。彼らが確立した「ドイツ系アメリカ人」のアイデンティティは、エスニック分野における 19 世紀の成功例の一つである。彼らの多くは中西部に農場を求め、多角的同時栽培で成功した。しかしそこに至る途中の都市ミルウォーキー、シカゴに止まる者も多かった。彼らはそこにビールと醸造技術を導入した。これら「リトル・ドイツ」の中には、歌や議論に始まり体操クラブに至るありとあらゆるドイツ活動があった。(ナンシー・グリーン『多民族の国アメリカ』, 創元社, 1997. p 61-62.)

**1825 年から 1828 年の間に、ヤーン体操を最初に米国に導入したのは、フォーレン、ベック、リーパー、フォーカーによるものであった。彼らはドイツ体操の祖ヤーンと交わり、あるいは欧州における大学在学中に彼の感化を受けた者で、1819 年カール・サンドのコッチャー虐殺の後、神聖同盟のとった反動方針の為に、自分の故国を離れて米、英に逃れた人々たちであった。(Fred. Eugene Leonald, “A Guide to the History of Physical Education”, 1923. p290)

I. “A Gymnastic School” の設立構想

1. ボストンにおける「公立体操場」設立までの動き

表 1 Boston Public Gymnasium 設立までの動き

1823 年	Round Hill School, Gymnastics を開始
1824 年	W. B. Fowle, monitorial School において、体操を導入
11. 5	Follen, Beck と共に仏国 (ル・アーヴル) を立って、米国に向かう。
1825 年	
2 月中旬	Charles Beck, Round Hill School のラテン語及び体操講師となる。 (この頃、同校体操を正課に採用)
2. 22	Dr. J. G. Coffin, ハーバード大学で体育に関する講義 (3 回) を実施
4. 15	第一回体育会議を開催 (Harvard University)
7.	Dr. Follen, Beck をノーザンブトンに訪ねる。
10. 27	書簡「Dr. Beck 招聘の件」(from J. Jackson to President Kirkland)
. 28	書簡「ハーバード大学に Gymnasium を開設する件について」(from J. Warren to President Kirkland)
〃	体育会議において、Charles Beck の招聘を決定 (Harvard University)
11. 17	書簡「Gymnasium の開設について」(from J. Webster to J. Warren)
12.	Charles Follen, ケンブリッジに移る。 (ハーバード大学ドイツ語講師に任命)
1826 年	
1. 8	書簡「米国招聘に対する要求」(Prof. Jahn answered to Amory)
. 22	書簡「Jahn 招聘に関する回答」(Amory answered from Göttingen to Warren) (この頃、Dr. Follen ハーバード大学で、「ヤーン体操」を始める。)
3. 5	Dr. Follen, Dr. Beck に宛て、ハーバード大学における体操の開始及びボストン公立体操学校設置を予告
4. 4	out-door Gymnasium の設備リストを提出 (from J. Webster & C. Follen to President Kirkland)

5. 1	ボストン市, Public Gymnasium 用地として, Boylston street 西側の土地使用を認める。 (2年間)
6. 15	設立委員会, Exchange Coffee House において, 会議開催を決議
. 17	書簡「体操担当教授招請を依頼」(from Dr. Warren to Prof. Jahn)
. 26	Boston Public Gymnasium 設立請願書提出
9. 18	ハーバード大学, Dr. Follen を Gymnasium 監督に命じる。
. 28	Boston Public Gymnasium 開設
1827 年	
2. 20	Boston Gymnasium 理事会開催
4. 13	Dr. Lieber Swimming School の開設及び Gymnasium 監督の招請を受諾
6. 20	Dr. Lieber 英国 (リバプール) を立って, 米国に向かう。
6 月末	Dr. Follen ボストン Gymnasium 監督を辞任
7.	Dr. Lieber // // // に任命
7. 3	Dr. Lieber 到着の報告及び Swimming School 開設の案内
. 18	Swimming School 開設
	ハーバード大学, Verley 氏をフェンシング講師として招聘 (6ヶ月間)
8. 7	『A Treatise on Gymnastics』(Jahn) の出版に関して, 広告
	Dr. Lieber, ボストン Gymnasium 監督を辞任
秋	Coporation, Dr. Follen を Gymnasium の監督として任命
1828 年	
1.	『A Treatise on Gymnastics』(Jahn) 出版一序文を Dr. Beck 執筆
	Boston Public Gymnasium 閉鎖
29 年	
1. 21	Boston Gymnasium 理事会開催
. 23	W. B. Fowle, Dr. Warren に「ワシントン・ガーデンの土地貸与」の件で報告
1830 年	ハーバード大学, Gymnasium を閉鎖
31 年	
32 年	
	Round Hill School, 財政的理由により, 閉校
	Swimming School を閉鎖

1810 年～	高等学校の生徒 (ベルリン) として, ヤーンの感化を受けハーゼンハイデ体操場に通う。
1822 年	ベルリン大学で古典学を教える。
7 月	ハイデルベルクのルター教会の宣教師となる。
23 年	チュービンゲン大学より神学博士の学位取得
24 年 10 月	パリにおいてフォーレンと会う。
11 月	フォーレンと共に米国へ向かう。

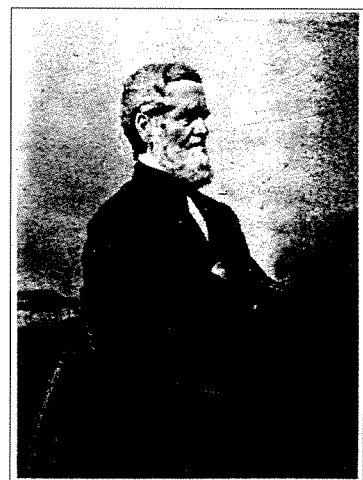


図1 Charles Beck(1798-1866)

当時行われた教育改革のうち、最も重要でかつ成功した例はマサチューセッツ州ノーザンプトンにあったラウンド・ヒル学校(Round Hill School, 1823～1834年)³⁾のものであった。その創設は、ジョセフ・グリーン・コグスウェル(Joseph Green Cogswell)とジョージ・バンクロフト(George Bancroft)という2人のハーバード大学卒業の講師によるものであった。2人は共にドイツのゲッティンゲン大学で博士号(Ph. D)を取得すると、ドイツを始めヨーロッパ各地を広範に見て回っている。

1823年6月に発行された学校案内書で次のように記している。「当校では、体質強化と精神の健全さを促進する方法として、身体運動を奨励し、毎日決まった時間を健全なスポーツと体操運動に割り当てることにしている。」また1826年3月25日付の回覧記事で、彼ら自身のことをこう述べている。「私達は、アメリカで最初に、体育を純然たる文芸制度に結び付けたのである。」続けて、「古代ギリシアで普及したものと同様の体育教育を近代国家に移植することは不可能なことである。しかるに、何かがなされねばならない。……私達が深く認識させられたのは、体育と倫理学を合体させる必要性であった。つまり、Jahnの教え子であり、かつ良き理解者であって、しかも近代における偉大な体育擁護論者の支持を得て、体育と倫理学の2つを結合させる計画の遂行に賛成するものである。」ここで指摘された人間こそチャールズ・ベック(Charles Beck)である。彼はドイツ難民ながら、バーゼルでの3年間の滞在中にフォーレン(Follen)が親交を結び、しかもフォーレンに同行してスイスからアメリカに渡ったのであった。

その後アメリカ議会の招請で、アメリカを再訪していたラファイエット將軍を通じて、ハーバード大学のジョージ・ティクノア(George Ticknor)教授と知己になった。ティクノア教授がジョージ・バンクロフト(George Bancroft)に宛てて推薦状を送っていたのであるが、ラウンド・ヒル学校でベックがラテン語と体育の講師の職につくのを直ちに約束づけたのである。そのため、1825年2月半ば、ベックはノーザンプトンでの新しい任務につくためフィラデルフィアをあとにした。彼がすぐに取りかかった屋外体育の種類のうち、完成されたものについての直接の証拠は明らかになっていない。

元生徒の一人が次のように述べている。「通常の体育練習は、丘の真下の台地で行われました。そこには、ドイツから新しく紹介された体操用具が山のようにありました。」

また別の“Round Hiller”(同窓生)によれば、「グラウンドのかなりの場所が体操練習のために使用され、しかもドイツの体育館で使用されていたあらゆる種類の器具が備えつけられていました。全校は各クラスに分かれていて、それぞれのクラスでは、1時間の授業が週3回、ベック博士によって指導されていました。」

1826年7月の、米国教育雑誌に載せられた新聞記事によれば、「ある組は5時半に始まり、ある組は6時15分に始まり、朝食は7時で7時半から9時まで、ただ朗読とダンスの練習のみがあり、9時から12時まで、他の組12時から1時まで休み、1時昼食2時から5時まで、その他の組5時から7時まで練習と娯楽であった。この時には体操科の組のみが、天候の許す時だけ指導を受けた。次ぎに夕食を終え、8時に熱心に体操をして、後小さい子供は床に就き、その他はもう1時間勉強をさせられた。」

このような理由から、当時人々は、ラウンド・ヒルの「体育」をハーゼンハイデの縮小版であると見做していた。

1824年にすでにボストンの学校で規則的かつ系統的に体操導入を行った事例がみられた。後に体操場設立メンバーに加わり、会計係に選ばれたウィリアム・B・ファウルの指導による学校(通

常はモニター型システムと呼ばれる相互指導システムを導入した)* においてであった。

* 一人の主任教師が多数の助教(モニター)を指揮して、進度の異なる生徒同士が砂スレートや掛図を用いて競争で教え合うのを監督させる、分団式の大量一斉教授の方式をいう。

これで千人からの児童を一人の主任教員が教えることも可能であるとされ、19世紀の前半特に10年代の英国の産業都市を中心に普及した。これは従来の慈善学校やディム・スクールに内在していた一切の隘路を克服するものとして英国国教会派のベルと非国教徒側のランカスターによって競合しつつ推進された。この方式で教えられた内容は主として聖書の読み方、初歩の書き方に限定されていた。

彼は体育をこの学校に導入しようとする試み⁹⁾について述べ、第一に女性に適した運動の選択という観点から、第二に生徒の性格と品行に与える運動効果の観点からその重要性を指摘した。

「それはおそらく米国で初めてのことであっただろう。この授業は数年間続いたが、親たちの何らかの誤解がもとで徐々に中断されていった。その後、美容体操(Callisthenics)を軽視していたがそれをある程度改善するために、もう一つの大膽な手段がとられた。週一回、午後はダンスに当てられた。指導は教室で行われ、ファウル氏は秩序を保つため常にその場にいた。特別な服装は一切必要なく、公開の舞踏会も男女の交際も許されなかった。実際、この優雅な芸術の持つ重大な欠点は全て取り除かれ、比較的少ない費用で優れた結果が得られた。」当時の模様⁹⁾をこの様に述べている。

1825年頃ケンブリッジ(ハーバード大学)で毎年行う講義の中で、体育に関する内容が顕著にみられるようになった。ジョン・C・コフィン博士は、知的、道徳的文化と体育の関係——最近のドイツ、デンマーク、スイス、フランス体操学校における教育と実践を通して——と題して3回にわたり講義を行った。またダニエル・ウェブスターは、講義の中で、体の器官組織の発達における体操の重要性と、元来あるべき程度の体力を維持するために体操が必要であることを強調した。当時、大多数の大学生の健康状態が明らかに衰えていたことから、これらの事が重視され、大学当局が、学生の運動のためグラウンドを割り当て、体操開始の準備をするきっかけとなった。

こうした気運を背景にして、ボストン公立体操学校の設立を急速に押し進める世論が一気に盛り上がりを見せた。

1825年11月17日付ウェブスターからワレン博士宛ての書簡¹⁰⁾によれば、

「1825年頃には、公立体操学校の設立という構想がボストンで練られていた。(中略)若き紳士たちは、こぞってこの計画に参加し、器械類は長年手入れされ、使用され続けたが、今では全て撤去されているはずである。ボストンでは、運動の重要性に感心した一流の紳士たちが、快くそして真剣に公立体操学校の設立計画に協力した。彼らの中には、ウィリアム・サリバン、ジョージ・ティックナー、ジャッジ・プレスコット、ジョシア・クインシー、ダニエル・ウェブスター、ピーター・O・サッチャー、ジョン・A・ロウエル等がいた。これらの紳士の1人からの手紙では、体を鍛えることと頭を鍛えることを結合することの必要性を、非常に力強く記している。」と述べ、すでにボストンでは、多くの人々が体育の重要性を認識し体操学校を設立する世論が非常に高まりを示していることを指摘していた。続いてワレン博士に宛てた書簡では、

「私は体操学校というアイディアが非常に気に入っています。それは私が常々考えてい

たことであり、その点に関して時代の流れが変わる必要があると思っていました。教育担当者は、体が人間の一部分であるということを時には忘れてしまうようです。私供の大学を卒業する多くの若者は、本当に熱心で、学識もありますが、顔が青白く、貧弱な胸をしているのはとても不安なことです。一般的で素朴な娯楽はわが校にも長い間ありましたが、ずっと前に完全に忘れ去られてしまったようであり、それに代わる有用なものは何もありません。知性を磨くことが必要であると同様に、この世界においては、その知性を守る健全な体も必要です。節制と運動の計り知れぬ有益性を青年たちに対し強く主張することを支援し、何らかのお役に立てると思いますので、貴方の活動を喜んで援助したいと思います。」

とウェブスターは述べ、今こそまさにその運動を起こす時期にあたっていることを認識し、この計画に惜しめない協力を約束している。ここでの二人の書簡に窺えるように、公立体操学校の設立構想は、多くの人々からの支持を得て実現に向かって確かな歩みを見せ始めていた。

2. ヤーン (Friedrich. Ludwig. Jahn) 教授の招聘とドイツ体操の導入

1) ヤーン教授の招聘計画

ボストンでは、公立体操学校の設立に向けての世論が高まり、実際に体操学校を開校する手段が講じられることになった。当面する課題として、体操の指導者の確保と学校用地にあてる適当な場所の提供が急がれた。

筆者は、1995年9月の渡米の際にマサチューセッツ州ケンブリッジのハーバード大学図書館において、幸いにして「ヤーン招聘に関する書簡」を発掘することができた。「ドイツ体操の始祖」と称されたヤーンを直にアメリカに招く計画は、これまで体育史上に取り上げられた例はなかった。この箇所では、ヤーンの書簡を中心にヤーン教授の招聘計画について明らかにしていく。

1825年頃には、ボストンに体操を導入しようという試みが真剣になされた。表-1. にみられる様に、同年4月ハーバード大学で最初の体育会議が開催され、10月に開かれた同会議では、ベック博士の招聘を決定していた。この時の様子は、ジャクソン及びワレン両博士から学長に宛てた書簡⁷⁾により知ることができる。

「もしベック博士がだめならば、あのドイツ人の先生(名前は申し上げかねますが)に同じ仕事を頼めるかもしれませんが、またこの科目を教えたことのある誰か別のドイツ人でもよいでしょう。または、最後の手段として、わが国の人間で、できればわが校の卒業生からちょうど良い人を見つけて、まずこの有用な科目を学んでから、教えてもらうことも可能でしょう。

または、もしかしたら、ベック博士は、6ヶ月間なら手伝ってくれるかもしれません。この間に様々なクラスが何らかの形で組織、編成され、ベック博士から多くの情報を得られるでしょう。その後は生徒が自分たちの力で活動を続け、その知識を各グループのメンバーに伝えることによって、大学内で知識を永続させることができるでしょう。

J. ジャクソン」

ワレンの書簡⁷⁾ではもっと詳しく述べられている。

「貴方からのメモを受け取った後、私は貴方が報告を受けたがっていることをジャクソン博士に伝えました。我々は、委員会の会議を要請することを考えましたが、その後彼から同封の手紙を受け取りました。この手紙は、以下の意見を読む前に読んでいただい

た方が良いかと思います。

ベック博士かその他の体育について詳しく知っている者を校長として迎えることが非常に望まれます。しかし、1年足らずの期間でドイツからこのような人物を見つけられるとは思えませんし、またベック博士を現在の雇用主が手放す可能性は非常に低いと思います。体操学校の設立が延期されるようなことがあれば、忘れられてしまう恐れもあります。

このような状況においては、この科目の教授を待つことなく体操学校を開校する手段を講ずることが得策でしょう。若者たちが行う一般的な競技のためのあらゆる設備と、それらを使うための隔絶された場所を提供するのが一番良いと思います。その他にも、悪天候の場合は、屋内でできるものなど、なんらかの特別な運動が必要になるでしょう。

もし提案された計画がこのような形で進められれば、完全に失敗することはあり得ませんし、このように始めたからといって、より人為的な形の運動を教えるのに適当な人物を招くことが可能になった時にそのような運動の導入が妨げられるということはありません。体操学校一校に必要なスペースは、長さ200ヤード、幅60ヤード程でしょうが、これでは学生全員を収容できないし、事業の成功のためにはクラス分けが必要であると思われるので、この4倍のスペース、つまり約4エーカーが必要になるでしょう。このスペースの半分なら恐らく大丈夫でしょう。100×25フィートくらいの屋根付きスペースも必要でしょう。これは4つの個別の建物か小屋にするか、あるいは100フィート四方の中心的建物を一つ作ることも可能でしょう。(傍線 筆者)

卒業生や、たぶん当局関係者も何人かはしばしば体操学校に行くでしょう。これは恐らく学生を集めるのに最良の方法になるはずです。現在の状況では、厳密な計画を提案するのではなく、単に2つの点について、貴方の決断をお願いしたいと思います。

1. ベック博士の招聘を試みるべきか。2. 直ちに適当な土地を手に入れるべきか。

ジョン・C・ワレン」

まずジャクソン博士の書簡では、ベック招聘の可能性を諾否の両面から探り、最悪の事態も予測して善後策を練っていたこと、首尾よくベック招聘に成功した場合には、短期間にそのすべてを吸収し、学生自らが活動を継続できる力量をつけていくことが肝要であることを指摘した。ワレン博士の場合は、ベック博士招聘の困難さを指摘しながらも、まず体操学校の開校を第一に優先すべきであること、そして何よりも場所の確保を最優先することを強調している。ここで注目すべき点は、運動場に必要スペースとして約4エーカー（2エーカーでも可）を要求し、合わせて屋内運動施設（運動の為の専用機能を有する体育館の意味：筆者注）として100×25フィート程度の建物を構想していたことがわかる。

ドイツでは、体育館の成立*はほぼ1842年以降と推定されることから、この時期すでに米国において体育館設立の構想が、はっきり打ち出されていたことになる。これは、大いに注目すべき事実である。

* ツルネン禁止以後、室内での徒手・器械体操、医療体操の全盛時代が訪れた。しかし、これを促進した人々といえども、種々の用具を合目的に設置した、本格的な体育館を新設するには至らなかったようである。これに対し、シュピースは体育館の機能を特に重視し、

2学級の同時授業を配慮した本格的な学校体育館を新設した。おそらく、これがドイツの最初のものであり、後代の範となったものといえよう。尚、ダルムシュタットでは、理想的体育館に付設して、運動場が作られていた。(成田十次郎、『学校・社会体育の成立過程』、不昧堂、1997.p 511)

そしてその結果、卒業生や当局関係者が学校に通い始めるであろうが、このことこそ最大の宣伝効果をもたらすとしている。今緊急に解決すべき問題として、ベック招聘と体操学校に必要な土地の確保を提案していた。

その様な折り、ワレン博士は、当時ゲッティンゲン大学の学生であったウィリアム・エモリー(William Amory)からのヤーン教授招聘に関する手紙⁸⁾の返事を受け取った。

1826年1月22日

ワレン博士様

ベルリンのライマー氏から今日返事をいただきました。私は、ゲッティンゲン到着後に、彼の友達のヤーン教授の件で彼に手紙を書き、ハーバード大学当局が、ケンブリッジに体操学校を設けたいという旨と、ヤーン教授がどのような条件ならアメリカに行って体育とドイツ語を教えてくれるかを知りたがっている事を説明いたしました。ライマー氏は今月10日付けの返事の中で、私の12月26日付けの手紙に対する返事が、私の手紙の到着時に彼が不在だったためにやむを得ず遅れてしまったことを謝罪しています。

これにより、この件において長い遅れが生じたことをご了承いただきたいと思います。ライマー氏の手紙の共に、ヤーン教授自身からも手紙を受け取りましたが、これにもライマー氏の手紙の中の重要事項が全て繰り返されていますので、英語に訳したものを同封します。

サラリーについては、ライマー氏は非常に明快です。彼によると、ヤーン教授の年俸は2千ドル以上でなければならず、旅費も要求しています。彼はまた、プロイセン政府からの年金と妻が将来受け取る年金は、長い投獄から免除されるために使われるとか、前の仕事を再開しないという条件であるというヤーン教授の大袈裟な発言についても少し説明しています。ヤーン教授の手紙によると、彼は金銭問題を解決するために数年間は自国に止まらなければならないようですが、本当はそうではなく、彼の条件を検討した人たちが、条件は受け入れるのに十分適当であると考えれば、いつでも求めに応じられるのです。この交渉は、成功するように思われませんので、終りにするべきでしょう。これは、非常に残念な事です。私が問い合わせた誰もが、ヤーン教授は優秀で知的な人物であると一般に考えられていると言っていたために特にそう思います。ヤーン教授に彼の条件について問い合わせた時に、私は自分が権限を持つと考える全てのことをしました。彼の要求が法外と思えるなら、貴方の条件を彼に提案すれば、彼は自分の主張の一部を取り消すかもしれませんし、そうでなければ、違った生活状況や年齢の別の人物が見つかるかもしれません。また、ヤーン教授は、快く選定を手伝ってくれると思います。私ももちろんこの目的の達成や他のどのようなことについても、お役に立てることがあれば喜んでいたします。(ヤーン氏のいくつかの論点に貴方が賛同するならば)大学図書館の責任者であるB及びB教授が、蔵書購入の際にはヤーン氏が間違いなく非

常に賢明な選択をすると話していたことだけ、付け加えておきます。(傍線 筆者)

ご家族によろしく。

敬具

ウィリアム・エモリー

寄せられた返事の内容を要約すると凡そ以下の様になる。

1825年12月26日付け、エモリーがヤーンの友人ライマーに宛てた手紙の中で、ハーバード大学が、ケンブリッジに体操学校設立を予定していること、ヤーン教授のアメリカ招聘の条件について知りがっていることを説明した。これに対する返事がライマーから寄せられた。①ヤーン教授の年俸は2000ドル以上とすること、加えて旅費も支給のこと。②プロイセン政府からの年金と妻が将来受け取る年金は、長い投獄からの免除資金として使う。③前の仕事を再開しない。④金銭問題解決のため数年間はドイツに止まる必要がある。しかしヤーンの真意は、彼の要求が入れられれば、即座に応じる姿勢を示していた。

エモリーは、周囲から高い評価を得ているヤーン教授の招聘に対して、様々な条件を勘案した結果、交渉は断念すべきであるとの結論を伝えた。

ヤーンからエモリーへの返事⁹⁾は、彼の「法外な要求」に関する理由のいくつかについて、かなりあいまいであるがより詳しく述べている。手紙の日付は1826年1月8日である。

自分自身が確立した業績が、他者の力によって打ち碎かれるのを見せつけられた者なら誰でも、必要な資力を得ることができればすぐに、喜んで復旧につとめるでしょう。

発見者または発明者として、自国に対して自分の立場の改善を申し出てそれを拒否された者は、誰であろうと、どこか別のところにも申し出るべきです。最後に、自国において無為に時を過ごすことを余儀なくされ、全ての仕事を禁じられている者は、大切な義務を犠牲にすることなく、人類のために尽くすでしょう。従って、この提案自体についてはためらう理由は何もなく、同時にまず解決しなければならない点がいくつかあります。

第一に、私は政府から給料と年間1000ドルの生涯年金を受け取っており、同時に有益かつ快適に過ごすための最良の機会と余暇を享受しております。よって数年後には、心配や悩みもなく品位ある生活をすることができます。第二に、過去6年間に私の財産は大きく減少したため、借金を全て返済するには数年間かかるでしょう。第三に、私の妻は私が死んだ後、ドイツに残っていれば、年間300ドルの生涯年金を受け取りますが、私が海を渡れば、それは支払われませんし、またアメリカへの移住によって、私や私が後に残す者たちの収入が奪われてしまっただけではありません。外国でドイツ語を教えるためには、最低でも3000ドル相当の価値のある、小規模なドイツ語の図書館を先に用意していただくことが絶対に必要です。この図書館は絶対に教師の言う通りに設置されるべきであります。これは、その他の点においても学校の財産であり続けるでしょう。体育科目を成功させ、深く根づかせるためには、出し惜しみせず、勇気をもって始めなければなりません。従って私は、4人のアシスタントを同行する許可をいただかなければなりません。彼らは全て科学教育に携わる若者であり、しかるべき報酬を得なければなりません。このように重要なことは、死によって一人の目が閉じられた後も、退けたり無視

することが許されてはなりません。体育は一度大西洋を越えて渡ってしまえば、別のアトランティス大陸が水没するまで、立派に繁栄するに違いありません。(傍線 筆者)

F. L. Jahn 自署

ヤーンがエモリーに送った手紙によれば、アメリカからの招聘に対していくつかの要求を提示した。

- ①政府から給料と年間 1000 ドルの年金を受取っており、将来に渡り安定した生活が保証されている。
- ②過去 6 年間に財産が大きく減少し、借金返済には数年間を費やす見込みである。
- ③妻は私の死後、ドイツにいれば年間 300 ドルの年金を受けるが、アメリカ移住によってその収入は全く失ってしまうことになる。
- ④外国でドイツ語を教えるには、3000 ドル相当のドイツ語の教師主導による図書館設置を進めるべきである。
- ⑤体育を成功・定着に導くために、4 名のアシスタント（科学教育専門）の同行を認め、相当の報酬を保証されるべきである。

以上、ヤーンによって出された要求内容は、当時の人々が用意できる額よりもはるかに多い収入を得るのでなければ、自国を捨てアメリカでの生活を確認することはできないという考えであった。そのため、一大学（ハーバード大学）や一都市（ボストン市）が抱えるには、あまりにも大きな負担であり過ぎたこと、また一般に体育を受容する人々の間で、その重要性を認識するまでには意識が十分に到達しておらず時期尚早であったことなどが、「ヤーンの招聘」を一層困難にした原因として挙げることができる。

2) ハーバード大学におけるドイツ体操の実施

ハーバード大学に、いち早くヤーン体操を取り入れるのに力を尽くした人物に、チャールズ・フォーレン（Charles Follen）が挙げられる。1825 年ドイツ語の最初の教師として迎えられてまもなくのことであった。1826 年 3 月 5 日付け、友人であるベックに次の様な手紙¹⁰⁾を書いている。

「私の大学が、体操の問題について、特別に貴殿にお世話になる事と思う。私は学生と共に体操運動（gymnastic exercises）を始めた。大学から我々は器具を受け、また土地も与えられる事になっています。現在においては、私は食堂の一つを用いていますが、学生は皆非常に熱心であります。もう少しでボストンにも、体操学校が出来るはずです。」

と述べ、大学当局の協力を得て、体操の実施に踏み切ったこと、近々にボストン近郊に体操学校の設置が予定されていることなどを示唆した。

また当時の様子を知るのに、『ハーバードの黎明』（1880 年 10 月、ハーバード大学出版部）の記事の中に、

「大学における体操指導の最初の運動は、自分の最上級の時に始まった。大学の医科教授たちが、学生に体操運動をなすことを、勧める檄を飛ばした。そして全校学生会が、大学の教会で開かれこの席上において、その檄に対する答えを作り、直ちにこの忠告に従うという意味の決議をした。使用されていない普通の教室の一つ（今大学の一階にある）をいろいろな体操に当てる事となり、その他の設備は、現在記念館となっている場所（デルタ）に設けた。」と説明している。

当時体操に一番興味・関心を持っていた、医学部の教授たちによりまずその必要性が指摘されたこと、直ちに学生もこの提案に共鳴したこと、実施場所は、当分の間、現有施設を用いていたことなどが述べられている。

ヤーンのドイツ体操場（ハーゼンハイデ体操場）の様子をよく知っている人は、誰でもすぐに『ハーバード』（第二巻, The Gymnasium, and Gymnastics in Harvard College）に、ヒギンソン（Thomas Wentworth Higginson）の述べた箇所があることに気がつく。

「古い記憶の内、自分に最も印象の深いものの一つは、今ケンブリッジのキールランド通りにあった、父の家の入り口から、びくびくしながら外をのぞいて、向かい側の運動場で、若い人たちが棒を登ったり、振ったり、跳ね回ったりしているのをみた、その瞬間の印象であった。それは今大きな記念館の立っている、デルタと呼ぶ三角の場所であった。これらの若い人たちが、運動するのに用いていた器具は、子供の眼には手枷か、あるいは絞首台の様にしか思われなかった。それは高い直立棒と横棒と梯子と、ぶら下がった縄と木や綱具からできた複雑なものによって構成されていた。……器具のある部分の下には、窪みが地中に掘ってあった。そしてそれは非常によく作られていたので、木部が除かれた後も、長く残っていた。」

と当時の様子をやや比喻を交えながら、正確に伝えている。そしてここに記述されている時期を、ほぼ1830年頃のものであると推定している。

また一方、ケンブリッジに所蔵されている『ハーバードカタログ』¹¹⁾によって、教員組織を取り上げてみると、

1825年10月	チャールズ・フォーレン……ドイツ語講師、民法講師
26年9月	同 上 …… 同 上
1827年	同 上 ……ドイツ語講師、体操場担任者

（1827年6月末にボストン体操場の監督を辞任した以後の彼の身分は、カタログによればハーバード大学体操場監督という肩書きが僅かに与えられていることがわかっている。）

以上の様に記述されている。これらのカタログのどの箇所にも、次の様な説明が付されている。「正規の体操運動は、体操場担任者のいる時には、水曜日と金曜日の1時までに行い、日が長けれ

1816年夏	学生同盟の運動おこる。 ゲッセン黒党組織される。 体操組合組織される。(フォーレン、リーダーとなる。)
18年3月	ゲッセン大学(民法及び宗教法)卒業
10月	イエナ大学私費研究生、傍ら「ローマ法典」の講義担当
19年3月	コッチャーブ虐殺 講義中止、ゲッセンに帰る。
冬	ゲッセンを去り、ストラスブルグへ、しばらくパリに滞在 (ラファイエットと交わる。)
1821年夏	バーゼルへ行く。大学で法理学及び形而上学担当の講師となる。
24年11月	米国へ渡航

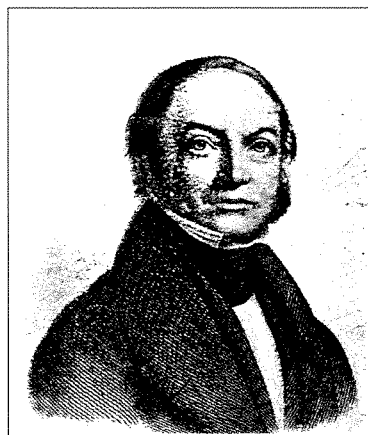


図2 Charles Follen(1796-1840)

ば夕食の後にも行った。月曜日には、クラスキャプテンと副キャプテンとが別々に担任者となって、一般運動の準備をした。

1828年及び1829年のカタログには、体操運動についての記述は欠落しており、フォーレンは、ドイツ語、倫理、法律及び教会史講師となっている。そして、1826年から1829年の間は、火曜、木曜日には12時から1時まで、軍事教練が行われており、別の日には、大行進を行ったことも伝えられている。」

当時の状況を回顧¹²⁾して、ワレン博士は、述べている。

「ウェブスター博士と、フォーレン博士の指導により、ボストンに一校、また、その直後にケンブリッジにも一校設立された。フォーレン博士は、そのドイツ式教育と気質から、必要な指導を行うのに非常に適した人材であった。ケンブリッジの学校は、目新しい間は盛況であったが、永続的な成功を収めるためには、忍耐強いドイツ気質を吹き込むことが必要であった。運動のための運動をこの地で普及させるのは容易なことではない。

わが国の人間が求めているのは、もっと刺激的なもの、つまりサッカーの試合とか木を切って割るという、楽しい遊びや有益な労働である。」

と、彼はすでにこの時新たに導入されつつあったドイツ体操について、その将来をある程度見通していたと推察される。

これらのことからニューイングランドにおいて、ドイツ体操導入のイニシアチブを取ったのは、ハーバード大学においてであった。ヤーン体操の直接の後継者が大学と関わりを持つ幸運にも恵まれたが、医学者を含む一群の教授たちの中には、早くから体育に関心を示す者の存在が認められた。すぐさま、大学の協力を取り付けその実施に踏み切った。ボストン市に一步先んじて行った体操実験の示した成果は、人々の注目するところとなり、一般学生から、市民全体を巻き込んだ体操実施へ一層拍車をかけることになった。その意味で、ハーバード大学が体操導入に果たした先駆的な役割は極めて重要であった。

II. 「ボストン公立体操場」設立請願書の起草(1826年6月26日)

ボストンで公立体操学校の設立という構想が盛んに練られていた時期—1826年に入って新しい動きがみられた。ワレン博士が中心になって、体操場設立用地を市当局との交渉によって獲得するための私的な委員会が組織された。当委員会は、1826年6月15日 Exchange Coffee House のホールにおいて会議開催を決定した。

同日開催された会議では、ウィリアム・サリバンが議長に、チャールズ P.カーティスが書記に選ばれた。会議の様子は、最近ウィリアム・ラッセルが発行した定期刊行物「米国教育雑誌」¹³⁾に、報告のかたちで綴じ込まれた。

「市当局は、1826年5月1日から2年間、ボイルストン通りの西の一面の使用を許可し、体操学校の授業を行う1人または複数の講師を雇う予定であった。このような学校は、生徒の身体能力を発達させ、それを社会生活における義務や理にかなった娯楽にどのように活用するかを指導し、本質的には健康と体力を増進させるであろう。ヨーロッパにおける同様の学校は、期待された効果を生み出している。大学の体操学校は、学生に対して、最も健全かつ有益な結果をもたらしている。この街の若者たち、特に座ってばかりいる者の体力と健康は、習慣を実質的に変化させればもっと増進するであろう。定期的に体育の授業を行えば、寿命が延び、人生はより楽しいものになるであろう。」

こうした意見や同様の意見により、以下のことがこの会議において満場一致で決議された。

第一に、ボストンにおいて体操学校を設立することは、得策である。

第二に、ウィリアム・サリバン、ジョン・C・ワレン、ジョージ・ティックナー、ジョン・C・コフィンおよびジョン・S・フォスターは、彼らが5名まで選べるその他の者たちとともに、この会議を招集するための公式通知にしたがって、委員会を結成し、最初の決議を行う。この委員会は、彼らが良いと考える時期および方法により、体操学校の設立のための任意の寄付をボストン市民に募り、その寄付を受け取って、同校の設立のために使う権限を持つ。

第三に、この会議は、ケンブリッジの大学の若い紳士たちの代表団(12名)を喜んで迎えており、彼らの情報から利益と恩恵を受けている。大学生たちがこの会議の目的に対して関心を抱くのは賞賛に値する。また、これは、学生たちの公共心の喜ぶべき表れであり、彼らが将来社会的に役立つことを立派に約束するものと考えられる。

大学の代表団は、補足の手紙を提出すると共に、大学付属の体操学校の体操の授業とその恩恵について口頭で説明し、委員会のために以下のことを会議で述べた。

- 1) 学生の健康が大きく改善されたこと。
- 2) 体力の強化の結果、知的活動においても活気が出ていること。
- 3) 学生の間で病気や消化不良の心配がなくなったこと。
- 4) 暇な時間に喫煙によって満たされることの多かった「刺激への欲求」が、今では体操学校の男らしい運動によって完全に満たされていること。
- 5) 単純な動きから複雑な動きへと規則的に指導を行うことが、生徒を事故による怪我から守っていること。
- 6) 指導を受けていない者には、実行不可能ではないにしろ難しく見える運動がどんなに簡単かつ安全に行えるかを知って驚いたこと。
- 7) 一つの共通の関心事や、一つの賞賛されるべき趣味が、学生時代を通じて単なる他人同士に過ぎなかったかもしれない者たちにふれあいと友情をもたらしたという点で、体操

Professor of Anatomy and Surgery in
Harvard University ;
Surgeon at Massachusetts General Hospital ;
Honorary Member of Medical and
Chirurgical Society of London, etc.



図3 John Collins Warren (1778-1856)

の持つ社会的効果は、評価すべき最も重要な結果であること。

ハーバード大学の学生を通してすでに実践されていた体操の豊富な成果が、上記7点にわたって報告されている。健康、体力の保持・増進、疾病の減少、運動への理解の深まり、社会性の習得など運動実践を通して得られた様々な効果を明らかにした。

尚、この会議における議事録はそのまま出版されることが採決されていた。

市民と学生が会合して凡そ1ヶ月後、委員会は会議の議を経て「ボストン公立体操場」設立請願書¹⁴⁾を起草し、ボストン市民に通知した。

以下にその全文を掲載しておく。

体操場 (Gymnasium)*

ボストンの体操場設立を目的として任命された下に署名した委員会 (The under-signed Committee) より、謹んで市民の皆様へ告知いたします。

体操場設立という重要な議案(measure)は、その趣旨にそって総額 5000 ドルが拠出され、賄われない限り、施行することはできません。

市当局から体操場設立のために割り当てられた土地は、建物がたち、囲い地となる予定です。一つまり、体操場が建設され、必要な器具や体操用具が整えられることになっております。指導員には賃金が支払われます。規律と訓練の実効性が立証されたあかつきには、体操場施設は市当局の監督下に移され、公費で運営されることになります。あるいは、やる気と能力のある者には、個人の管理・経営にゆだねることも十分に可能です。

資金が十分に拠出されるならば、お金を集金するための適切なスタッフが雇用されます。当議案における委員会の趣旨は、ボストン市民の利益であって、それ以外の何ものでもありません。体操場設立という目的達成のための準備はなされ、これまでのところは十分可能です。あとは、必要な資金づくりができるかどうかは、ただひとえに市民の意志にかんنانのです。それ以外の措置と機関は全て整えられているからです。各父兄、子供、そしてそれ以外の人たちにとって、幸福というものは人類の偉大なる進歩によって促進されるものであり、しかもそれは各年代の人たちに保障されるものであるから、教育のこの分野の紹介と支持に多大な関心があるに違いない。そうでなければ、他の全ての修練は比較的よいもののはずであるが、(実際は)不完全で、不出来なものである。

この体操場は全ての階層の者に開かれ、いかなる者の申し込みも受けることになっているので、献金の多少の金額にかかわらず、有り難く受けつけるものです。

(所 属)

ウィリアム・サリバン	Boston Lawyer
(起草) ジョン G. コフィン	Harvard Professor
(会長) ジョン C. ワレン	〃 〃
ジョージ・ティックノア	〃 〃
ジョン S. フォスター	〃 〃
トーマス・モートレイ	

ジョシア・クインシー・Jr Harvard Professor

ジョン B.ディヴィス

(会計) ウィリアム B.ファウル

追加署名

Monitorial School

() 内, 筆者注

1826 年 6 月 26 日, 委員会会議で採択され, 上記の告知が印刷され, 市内に在る何店かの保険会社に配布され, 尚かつ新聞に掲載されることになりました。

氏名:

住所:

寄付金額:

(ウラ書き)

基金からボストンの最初の体操場(責任者)へ

上記は, 随筆文や講義を通じて最初に体育を一般市民に呼びかけたコフィン博士によって執筆されたものです。そして, これまで多くの人が理論的に学んできたことを実践に移したニューイングランド州で最初の人間です。

1826 年 7 月 ボストンにて

[ボストン最初の体操場(開設)のためのオリジナルな寄付金申込書]

1826 年 7 月

* ボストン・パブリック・ライブラリーで見つかった史料では, 「Gymnasium」という用語が使用されている。筆者は, この訳語を慎重に扱った。当時米国での体育事情を考慮し, 本国ドイツでの体育事情を検討した結果, I. の 2. 1) ワレン博士から学長に宛てた書簡中에서도すでに指摘した様に, 当時ハーバード関係者には, 屋内体操場(つまり体育館を指す)構想が顕著にみられたこと, 合わせて広い運動場をセットで捉えていた事実が認められたことから, 両者の意味を含んだ用語として「体操場」と訳した。尚, 史料上(注14)では, 「Gymnasium」すなわち「a gymnastic school」と解していることがわかる。

設立委員会によって起草された請願書の骨子は,

第一に, 当委員会が主体となって体操場の設立準備資金 5000 ドルを用意すること。但しこれは主として, 市民の寄付金によって賄われる予定であること。

第二に, ボストン市から割り当てられた土地(トレモント通りとウェスト通りの一画, ボストン・コモン反対側にあるワシントン・ガーデン)に, 体操場が建てられ, 必要な器具や体操用具が整備されることになっていること。

第三に, 体操場を管理・指導する指導員には, 賃金が支払われる。また状況に応じて, 集金係

りの雇用も検討中であること。

第四に、開設した後、体操場の運営が軌道に乗れば、これをボストン市の監督下に移つし、以後公費で運営する予定であること。但し個人的に有能でかつ実行力を有する者がいた場合には、管理・経営を個人に委ねる場合もある。

第五に、体操場を設立する趣旨は、一重にボストン市民の利益を最優先することがねらいであること。

最後に、体操場は全ての階層に等しく開かれ、いかなる者の申し込みも受けることとする。

要約すると以上の様である。

コフィン博士によって起草された市民を主体とした構成による、平等主義に基づいた運営をその内容としたパンフレット(A 4版, 1枚, ウラ書き)の形で印刷され、広くボストン市民に配布された。

III. ボストン公立体操学校の開設

1. 公立体操場の開設(1826年9月28日)

1826年3月5日付け、フォーレンがベックに宛てた手紙に、「ボストンに間もなく体操学校が出るはずである。」と記しているが、これがおそらくボストン公立体操学校設置の構想を公にした端緒であったと見做される。多くの人が、この案に興味を持ち、彼がもし「適当な器具の設置を監督し、且主任監督となるなら」俸給を与えると提議し、適当な助手を雇うことを許した。9月26日、フォーレンはベックに手紙を出し、「明後日より、ボストンで私のロープダンシングを始める。その場所には、私の絞首台が立派に立っている。そして大小の上品、下品な各種の絞首される悪漢が揃っている。」と比喩を交えてその光景を描写した。

ボストン体操学校は、9月28日に最初に設定された場所ではなくて、コモン反対側ウェスト

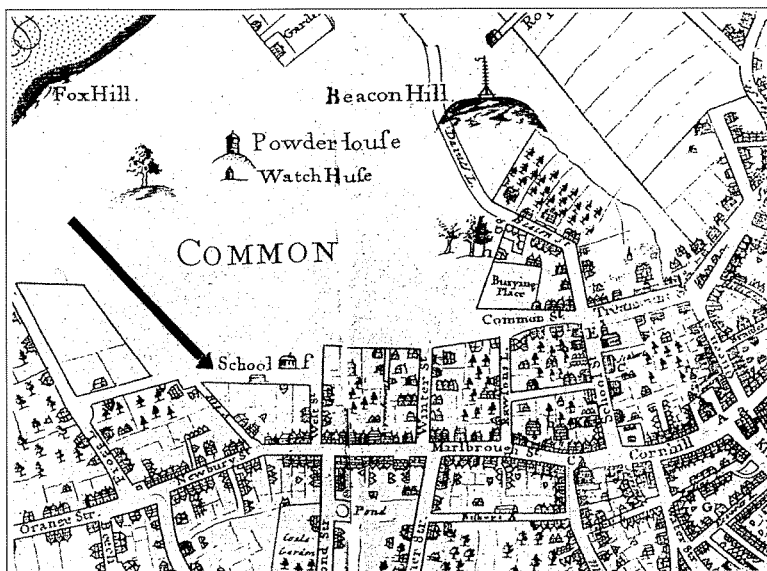


図4 Boston Public Gymnasium (1826. 9. 28)
Boston Historical Map より作成

通り及びトレモント通りの一面に開設された。

「ボストン医学通信」(1826年10月3日)は、この模様を次の様に紹介している。

「先週木曜日の午前6時、練習と指導を目的として、ボストン体操場が開館した。主任指導員は、高名な Jahn 氏の弟子のチャールズ・フォーレン氏で、補助指導員には、近年ケンブリッジ(ハーバード大学)の体育科で名の知れているバージニア出身のジョージ F. ターナー氏があたっている。

パリの著名な運動養成者コロネル・アモロス (Colonel Amoros) 氏より何冊もの書籍と長文の手紙を受けている。この教養が深く寛大でもある慈善家は、多忙であるにもかかわらず、氏のもとに寄せられた問い合わせに対して絶えず満足させるような返答をするからである。というのも、氏が教授している理論と実践を同じ位重要視し、尚かつパリ市民の益に適うように考えているからである。

ある者はロンドンから次の様に書いてよこしている。

体育は、今や国中に普及している。老若男女を問わず、全ての人に行き渡っているのだ。体操の躍動的でしかも優雅な運動の中で、木馬に跳び乗ったり三角がたに運動することが、特に人氣を博していることは、注目に値するものである。信じられないような事も毎日のように起きている。例えば、数か月前までは非常に高慢であつたり消化不良のため跳びはねながら脚を持ち上げるようなことなど出来なかつたような人たちにおいてである。彼らの悪いところが治ってきているのだ。つまり、消化不良やどうしようもない位悪い欠点や、非常識な態度といったものが治りつつあるのである。

体操によって快活な気持ちになるため、快眠、快食が取れ、色つやも良くなってきた。もっとすばらしい効果は、マナーが良くなったことである。

高慢さ、無気力さ、病弱さ、気紛れといった悪いところを、日常の生活行動や社会的協調が計れるように矯正したり、身体的動作、活力、有益性、享受性といったものを発達させることができるのは、確かに喜ばしいことである。」

そして米国教育雑誌の11月号には、「1ヶ月間その行進を見、且つその運動をすれば、この運動をやってみた人には、非常に満足を与えるということがわかる。年齢の異なつた生徒に——10才から50才まで——行ふ、この体操運動の肉体的効果は、驚くべきものである。多くの人は、その体力が急に増した。生徒はいろいろな職業に携わっている。一医師、弁護士、牧師等が、商売をしている若い人や、小学校の生徒とも入り交じっていた。」

様々な職業の紳士たち、若者、生徒などを含む多数が出席し、非常に熱心に運動に参加した。間もなく彼らはそのお陰で、筋力がアップし、食欲が増進し、血色の良い健康的な顔になった。この体操学校の設立は、この国の目新しいものによくある様に、都市や地方に次々に影響を与えた。

1827年、フォーレンは在任1年を待たずして、体操学校監督を辞任した。

学生より彼の教えを感謝し、惜別の意を込めた手紙¹⁵⁾が届いた。

「博士が私たちに紹介して下さつた運動は、しかもそれが私たちの身体の健康と精神力に連なっていることを経験からわかつたものでありますが、各都市や公教育の行われている場所に急速に拡がっていき、国民的利益になっていくのを見ることができでしよう。日々の労働の必要性のないクラスのアメリカー人は、身体的運動を疎かにしていることでよく知られています。その結果、

筋肉性弱質と人間の中枢器官の虚弱から生ずる病気が蔓延しているのです。体操の持つ男性的で活気のある運動が、そのような人たちの倦怠を吹き飛ばしてしまうことを願うものです。健康な社会においては、消化不良などという病気など甘やかされない日が来るのを願うものです。」

博士はこれに答えて、「ボストン体操学校がその根底に真の愛国的な見方や練習を活気づけてくれる熱心さを持ったこと。各個人が練習から精神の健全さ、快活さ、親切心を身につけたこと。同様な学校が他の都市に出来上がるのを見る喜びは、私たちの希望を正当化すること。体操がアメリカ教育の正式分野として認められ、しかも生活事情ゆえに体力の発育を怠っている人たちにあって、体操が健康や体力、そして魅力の源として認められる日が早く訪れること。」などをそこでの最後のはなむけの言葉として結んだ。

2. 付設水泳学校の開設(1827年7月18日)

1827年6月末、フォーレンの後をついでフランシス・リーバー(Francis Lieber)がボストン体操学校の監督に就任した。

かつて彼はヤーンと親交があり、1811年には、ハーゼンハイデ体操場で、相知る仲であった。また1817年にはヤーンに従ってリーゲン島を翌1818年にはリーゼン山に数回徒歩旅行を行い、多くのプロシア体操場の視察を行った経験を持っていた。その後1820年イエナ大学で博士の学位を取得した。1823年8月一端プロシアに戻ったが、政情不安定を自ら察知して、ドイツからの脱出を企てた。当時ベルリンの水泳学校の監督をしていて、彼の水泳の技倆と人格をよく知っていた陸軍少将プフェルを尋ね、渡航のできる秘密の方法を教わった。1826年3月17日ベルリンを出発し、ロンドンに着いた。彼は1年間ロンドンで過ごしながら、著名な体操関係者(ニール、フォーカーなど)と交流を持った。

米国教育雑誌(1826年11月)には、次の様な記事がみられる。

米国の文学通で、ロンドンで有名なフォーカー教授の仕事を手伝いつつある、ニール(John Neal)氏(アメリカ人：筆者注)の最近の手紙によれば、

「貴方(リーバー)は自分が体育に熱心な事をご存じでしょう。私(ニール)は1年余り、熱心に各種の体操の理論及び実態を研究し、これをわが国の人々に役立つ様になればよいと思っていた。私は3人の人々(フォーレン、ベック、リーバー)を見つけた。その人たちは、前例のない

1811年	ハーゼンハイデでヤーンと交わる。 (この間開戦戦争に参戦)
17年	熱心なヤーン体操家の一人として、ヤーンに従いクーゲン島に旅行。
19年7月	ヤーン逮捕、直後リーバーも国事犯として捕られる。
1820年	イエナ大学博士号取得
26年3月	ベルリンを立つ。ロンドンへ(3月27日) 1年間ロンドンに滞在
27年6月	リバプールを立て、米国へ向かう。

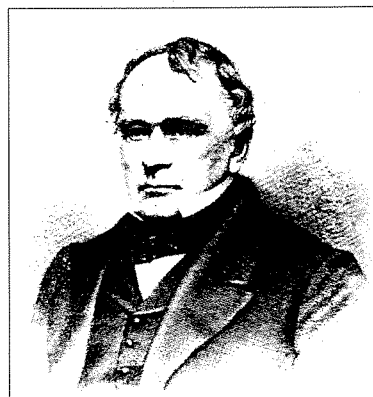


図5 Francis Lieber(1800-1872)

程立派な教師である。自分（ニール）はヤーン教授の証明を添えて、これを雇われる事をお薦めする。」

この時出会ったニールは、リーバーのアメリカ行きを積極的に勧めていたことがわかる。

またこの時のヤーンの証明書¹⁶⁾は以下の内容であった。

「フランシス・リーバー氏は、哲学博士であって、連続して数年間夏冬共に私が計画し、監督していた体操運動の全過程を終えた人である。彼はまた他の人々と共に私に従って、1817年にリーゲン島及び1818年にリーゼン山に数回徒歩旅行を行い、その旅行中我々は、多くのプロシア体操場を訪問した。彼が道徳的に立派な人であり、頭脳明晰にして、体操のよき指導者であり、教師である事を認めたので、すでに1817年にエクストラチャペレーにあるライン州の政庁に、彼に体操運動教師の職を与える事を願ったところ、若い学生たちに愛され、年長者や同輩からは尊敬されて、彼は委員会の会員に選ばれた。この委員会は、体操協会を代表するもので、一般に体操を向上させるため、同時に技倆と共に道徳、及び科学の進歩を計らんとする目的を持っているものであった。

リーバー博士が、毎日私と共にあった時に、彼は人種の発展の唯一の基礎である真理、義務、自由を永遠の標語として、熱心にこれを行った。彼はドイツ、スイスを通して、フランス、イタリア、ギリシアに旅行して、彼の判断力を増し且つ知識を広めたに相違ない。しかしこの点については、私は確かな事を、申し上げることは出来ない。何故なら、私の記憶には残っていたが、彼にその後会っていないからである。リーバー博士の要求により、私はこの証明書を与え、法律により刻印しそして私自身の手で書いて、封印し、私が今住んでいる町の証明を得たものである。

サクソニー、プロシア大公国、ウンツルト、フライブルグにて

1826. 8. 1

哲学博士

フリードリッヒ・ルードビッヒ・ヤーン 署名

リーバーは、この証明書の他にも、先に述べた陸軍少将プフェルからの推薦状も同時に持参していた。プフェルは水泳教授の新法を発明し、プロシア陸軍水泳学校を創設した人物であった。当時、この分野で最も著名な二人の強力な推薦があったお陰で、フォーレン博士の知るところとなり、直ちにハーバード大学の法律教授及びボストン体操学校の監督に任命された。

1827年4月13日水泳学校の開設及び体操学校監督としての招きを受諾するべく返事を送った。同年6月20日、ニューヨークに上陸し、新しい任地に向かった。

7月3日付けの「ボストン医学通信」は、彼の到着を次の様に報じている。

「フランシス・リーバー博士が、ワシントン・ガーデンの体育館を監督し、水泳学校を開くためにボストンに到着した。

博士はヤーンの弟子であり、水泳学校の指導は、プフェル将軍の開発した方式で教えることになる。この方式というのは、今ではプロシア陸軍の軍事教練の一部に採用されているものである。

また、この方式はヨーロッパの数多くの大都市で施行されているものでもある。

遊泳術の全指導講座により、参加生徒は、3週間から4週間でいかなる危険性の心配もなく、理論的かつ実践的に水泳を学ぶことができるであろう。」

と述べ、当時ドイツから招いた最高の指導者による最新鋭の水泳技術を駆使しての水泳指導をセールスポイントにして、短期間で安全かつ合理的に水泳が習得できることを、広くボストン市民にアピールした。

続いて7月14日の同通信では、

「リーバー博士の水泳学校は、ミルダム (Mill Dam) の北側にありますが、生徒の入会のため、来週水曜日の18日に開校いたします。

シーズン用入会料は、10ドルで、前金払いも可能です。

お申し込みは、来週水曜日までリーバー博士あてに、Exchange Coffee House で午後12時から2時までと、午後3時から4時まで受け付けています。それ以後は、水泳学校の開催期間中となります。

リーバー博士の教える水泳法は、プロシア軍の連隊の他、ベルリン、コブレンツ、ブリュッセル、コーニングスバークなどの王侯都市に水泳術を紹介した人物であるプロシア陸軍のプフェル將軍の方式に則ったものです。現在、同じ方式の水泳学校は、別のプロシア軍將校の指導のもとにロンドンでも開校されております。

健康な人間であれば、約3週間、毎日30分間の練習で水泳術を習得します。

学校は、毎日午前5時半から1時までと、午後4時から8時まで開催しています。

リーバー博士は、水泳学校内における礼儀作法を厳しく守り、生徒が入会証の裏に印刷されている諸規則を守る限り、生徒の安全を保証いたします。

7月14日」

以上の様に水泳学校の詳しい入会規則・方法を含む案内を行っている。前回の広告で紹介した水泳指導の中味に再度触れ、プロシア陸軍で広く普及しているものと同様な内容であり、ロンドンでもその流行がみられていると付け加え、広く市民の参加を呼びかけている。

水泳学校の実際の活動を示す史料は、ほとんどみられない。

わずかに、1827年8月7日の「医学通信」の『体操に関する論文』の出版広告の最後に、「リーバー博士は、ウェスタン・アベニューの北辺を少しいった所で、上げ潮に乗った様にとんとん拍子に成功している。」とその模様に触れている。

また1827年9月6日付けのリーバーが両親宛てた手紙によれば、ボストンで盛況を誇る水泳学校の存在を耳にし、J・Q・アダムス（アメリカ6代大統領）が学校参観を行った。彼はこの学校を大いに賞賛し、この様な公の健康を助長する学校を国中に設立したい旨の希望を述べている。このことから水泳学校は、最初から比較的順調にその活動を開始したといえる。しかし一方では、学生の水泳学校離れが一段と進み、1827年から1828年にかけて体操学校に対する関心も減少の傾向がみられた。そしてプリントショップには、体操家の風刺画が現れ始めた。

その運動は初心者にとっては、大変骨の折れるものであった。事実それらは統制されており、しばしば繰り返しが多くまた極めて退屈なものであった。

1827年水泳学校の最初のシーズンの終りを待って、リーバーは文学の仕事に転向した。まもなく百科全書を編集する仕事に専念し、1833年に新刊『アメリカ百科全書』（全13巻）の刊行を果たした。1833年以降は、法学に転じギラード大学、南カロライナ大学、最後は、ニューヨークのコロンビア大学で講義を担当した。

Ⅳ. ドイツ体操の推進—『A Treatise on Gymnasticks, taken chiefly from the German of F. L. Jahn』(Charles Beck. 1828)¹⁷⁾ 出版の意義

ボストン体操学校が開校して、1年後、ちょうどこの頃盛んになった体操についての簡潔で適切な理論書の出版が、待ち望まれていた。

1827年8月7日付け、「ボストン医学通信」の記事によれば、

ノーザンプトンのシメオン・バトラー (Simeon Butler) は、ヤーン (F.L.Jahn) のドイツ語本から引用した『体操に関する論文』の予約出版を企画していることを報じている。

その内容に関しては、体操についての簡潔で総合的な出版物、つまり一般読者の好奇心を満たし、適切な体操指導に必要な詳しい記述が載っている出版物であって、一般の人たちが容易に入手できるようになることを特に要望している。

次いで原著者の紹介を行い、教室のこの分野で論文を書いているドイツ人著者のうちで、ヤーンほど学識豊富な経験、そして熱意を持って論文を書いている者は他に類をみないであろうと高い評価を与えている。更に続けて、彼の論文には、独創性と科学的に説明する綿密さといった点で、非常に強い論点があると認められている。それ故に、なるべくして再び取り上げられることになったのである。

「近年の経験からわかるように、このような追加出版は独創的のものとなるであろう。」と述べている。

この本の出版は、ノーザンプトンのチャールズ・ベック博士 (Dr. Charles Beck) によって行われることになっていること。ベック氏は著作者(ヤーン)の元生徒であったということから、以下のような点は十分保証に耐えるものであると説明している。

つまり、1) 翻訳は原文に忠実になされ、例え追加、補足があっても、オリジナルの論文が持つ精神と論調において、軌を一にするものであると見做されること。

2) 出版される本は、八折判で200頁版となり、八枚の銅版画が含まれる見込みであること。また本の挿絵は、体操の訓練に長い間の知識と経験のある画家によって描かれた大変分かり易い内容になっていることなどを付け加えている。

本の予約申し込み価格として、1ドル75セントを予定していることも明らかにした。

体操訓練についての原則、実技、そして実態について造詣の深い、文字通りの友人は、この本について次の様に述べている。

「わが国の体操訓練の普及を見ていると、体操が各地で指導されるのであるから、ど

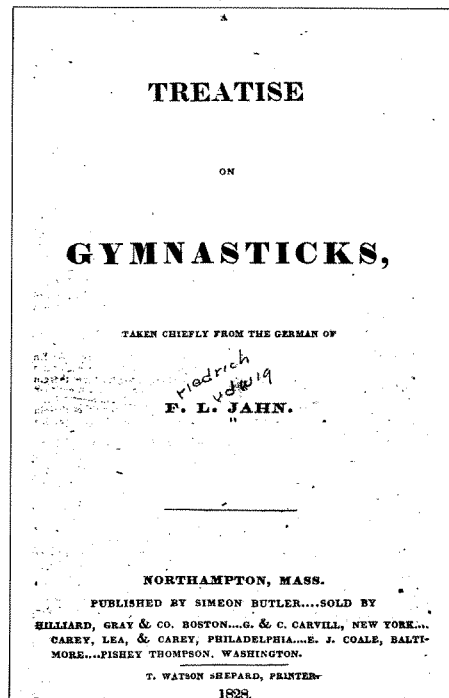


図6 『A Treatise on Gymnasticks』
(Charles Beck, 1828. 1)

こでも共通に使える基準本を早く出版する必要があるようだ。わが国の体操学校の必要性を満たす様な出版物は、ヤーンの本に匹敵する様なものはあるまい。だからこそ、この分野における彼の卓越した功績ゆえに、彼は、「体操の父」と呼ばれるのも当然なことである。彼の出版物は、その最初のものから、ドイツの各体操学校の教科書として使用されているのである。英国とアメリカの体育は、(ドイツと)同様な基準に則って育成されてきたのである。ヤーンの本が、私の知る限りの体操に関するどんな論文よりも勝っているのは、異なる練習を系統的に組み合わせていることと、それらの一つ一つを具体的に説明していることである。

ベック博士の本は、ヤーンのものに見られる重要な点に、後日改良されたことと何枚もの印刷画を一緒に組み合わせている。印刷画も、現在、ラウンド・ヒルの学校に関わりのあるドイツ人熟練画家によって、制作されたものである。最も重要な練習を描写する印刷画の有効性というのは、明白なことである。特に、学校の授業に参加する機会が与えられなくても体操を学びたいと希望する人たちにとっては、なおさらのことである。」

(傍線 筆者)

一般の読者の立場からすれば、バトラー氏には予約申し込みの遅れを待つことなく、直ちに出版に取りかかってほしいと思うものである。

何故ならば、論文の持つ価値と、その様な案内と指導に対する絶え間ない問い合わせによって、これまでに費やした氏の経費(労苦)に、すみやかに報いなければならないからである。

1828年1月、『体操に関する論文』は、ベック博士によって出版された。

この本の序論で、『約12年前、ドイツに於て原書が発行されるに至ったと同じ理由で、この米国に於て今やその必要がある。自分はヤーンの論説を固く信ずるものであるが、彼の序文と第五章を省き、第三章と第四章を入れ替えて、亜鈴体操に関する章を、第一章に加えた、その他除いた部分或いは最近の経験により加えた部分も多少ある。第七、第八版は、原書のままであるが、残り六版の印刷画(63枚の図)は、新しく掲載したものである。』と説明を加えている。

尚、同書の実際の内容構成は以下の様である。

First Section

Gymnastick Exercises

- I. Preparatory Exercises(予備的な運動)
- II. Walking
- III. Running
- IV. Leaping(幅跳び, 高跳び, ボールを用いた跳躍)
- V. Vaulting(跳躍)
- VI. Balancing
- VII. Exercises on the single Bar
- VIII. " " Parallel Bar
- IX. Climbing
- X. Throwing
- XI. Drawing

Third Section

Management of a Gymnasium

Fourth Section

Of the Foundation and Arrangement of a Gymnasium

Explanation of the Plates

- plate I
- " II
- " III
- " IV
- " V

XII. Pushing	// VI
XIII. Lifting	// VII
XIV. Carrying	plan of a gymnasium
XV. Exercises with Dumb-bell	// VIII
XVI. Wrestling	
XVII. Skipping with the Hoop	() 内, 筆者注
XVIII. // with the Rope	

Second Section

Gymnastic Games

おわりに

1826年ケンブリッジ及びボストンの両方で、相前後して創設された体操学校の存在意義について述べておく。

まず第一に、体操学校設立の運動は、階層・男女・人種などの枠を越えた著しい平等主義を促したことである。これは以下に示す事例で明らかにすることができる。

一つはすでにこれまでに述べた様に、社会の全ての階層の人々が体操学校に参加し、様々な生活状況の人々が交わることは、最も喜ばしいことと考えられた。

ニューイングランドの都市化が進行する第一波の影響で、体操学校は、社会全体のさらなる民主化の一つの手段と見做されたこと。このことの持つ意味は、極めて重要であった。

また体操学校の存在自体が、それに関連するいくつかの問題を提起した。具体的には、女性や黒人の運動への参加の是非を巡る問題であった。

まず W. B. ファウルが関与したモントリアル・スクールが、実際に体操を米国の女子学校で取り入れ、成功している最初のケースを示したことや「ボストン公立体操場」設立請願書の文言に謳われている通り「いかなる者の申し込みも受けること」とする趣旨に裏付けられ女性の運動への参加をより可能なものとした。(傍点 筆者)

1827年夏、ロンドンのフォーカー体操学校のメンバーでもあり、またボストン体操学校の校長候補として最初にリーバーが注目していたジョン・ニールは、英国より帰国しメイン州ポートランドに戻ると、市内に幾つかの体操学校を設立し、そこで体操活動に着手した。

この時初めて、アフリカ系アメリカ人の体操学校への出入りが討論されている。結果として、2名の有色人種の参加が許可されることになった。女性の運動への参加が認められたのと、同様な理由で黒人参加の問題も請願書の内容に保証され、抑々それが起草された時点から参加自由の権利を請け合うものであったといえる。

前にも触れた通り、ハーバード大学及びボストンの両方において、体操学校は突然閉鎖を余儀なくされた。この新しい動きが、大学の学生や、著名人や有力者の両方からあれ程熱心に歓迎されたことを考えると、その突然の衰退を説明することは容易ではない。

推測されるいくつかの理由を取り上げてみる。

エドワード・ジャービス（後に、1861年ボストン体育師範学校、理事）は、生理学的理由によるとして説明を加えた。彼の意見によると、運動は乱暴で活動的すぎ、一日のうちの誤った時間に行われていた点を指摘した。

体操学校の設立を最初に唱えたワレン博士は、この学校が、参加者に対して余りにも多くの努力を必要としたために、失敗したこと、また運動が目新しさの続く間だけしか行われなかったことも指摘した。

同様に彼は伝記¹⁸⁾の中でも、「忍耐強いドイツ人気質」と対称的に、「アメリカ人はより多くの刺激を必要とする」ため、アメリカで体操学校が永続的に成功することはできなかったとその主な理由を国民性の相違という観点から説明した箇所もみられる。その他の理由として、「学校の何らかの欠陥」が、予期せぬ閉鎖の原因であったかもしれないとも言っている。

リーバーが米国へ移住した当時に書いた文章を分析すると、彼が明らかに、学校の欠陥は運営のマンネリ化にあると考えていたことがわかる。大人は、若い頃非常に刺激的に思えた運動には(余り)興味がなくなっていることを指摘したものである。

「私たちから見ると、年齢に応じて運動を全く変えなかったことが理由に思えます。定期的な運動として、大人は体操学校の普通の運動とは何か違う、より高度なものを、そして体と同時にできるだけ心も満たす何かを求めています。少年時代に習った、お決まりの運動には飽きているのです。」

以上が体操学校に特に深い関わりを持った人々が述べた衰退の理由である。

ドイツ式の体操がなぜ単なる一時的流行に終わったのかを説明する上で、十分な論証がなされないままに終わっている。

ともあれワレン博士が後述した如く、体操学校設立の結果、男子や女子の学校、高等教育機関及び大学のほとんどに、小規模な付属の体操学校が設立されたことは確かな事実であった。

また運動不足に陥っていたアメリカの学者たちが、ドイツやイギリスと同様に、知的作業を妨げることなく健康を維持できるようになったことに対する満足感は、誰にも共通するものであった。

しかし、残念なことに、社会全体で知性を磨くことは、国の栄光と考えられるのに対して、肉体の鍛錬という精神は、徐々に弱まりつつあり、国全体に広まった普遍的で有用な影響力は、今では全く評価されていない状態に留まっていた。実際には、体操に関する計画も幾らかは残っており、また社会の知識階級は、自分たちの息子や娘たちにとって、精神的及び知的資質と同様に体力的資質の発達がいかに重要であるかということを十分知るようになっていたと当時の状況を分析している。

体操学校の設立に深く関わったワレン博士は、1830年8月ボストンで開催されたアメリカ教員講習会の「体育の重大なこと」と題した講演の中で、昨今話題になっている体操学校の存続期間の短さについて説明を行った。

「青年男女には、適当な身体運動の重大なことを論じて、更にこれに加えるに国中に、体操場を設立したことによって、体育上に新機軸を打ち出した。

それがめずらしがられている間は、皆熱心に運動をしたが、その重大さを知らないことと、体操場に欠陥があったために少なくとも私のいる地方では、段々に忘れられ、顧みられなくなってきた。

この体操場から得た効果は、私の寡聞によれば、非常な期待よりもはるかに多い。」¹⁹⁾と述べ更に彼は「学校に於いては、体操場で運動するを、正課の一部とせねばならぬと信ずる」とこの点

を大いに力説している。(傍点 筆者)

極めて斬新で先取的なドイツ体操導入の試みは、すぐさま開化することはなかったが、貴重な先行体験として人々の心に強く印象づけられることとなった。そして何よりも、運動のみに偏ることなくヤーンの理論を深く理解し科学的な根拠に基づいた体操を重視する方向が目指された。この時期ベック博士によって刊行された英語版『体操に関する論文』による普及活動は、極めて重要な意味を持つものであった。またモデルとなった本国ドイツに先駆けて、すでにこの時期(1825年)体育館構想がみられたことは、実に大きな発見であったといえよう。それは天候に左右されることなく、一年中安定した状態で体育活動が可能になることを意味し、正課体育の実現へ道を拓くものであった。

こうした体育に寄せる一群の医学者や教育者たちによる飽くなき探究²⁰⁾は、30年余りを経た1860年のアマーンプランに確実に引き継がれ大きく開化していくことになる。

今回史料の制約によって、明らかにできなかったケンブリッジ及びボストンの二つの体操学校の詳しい活動状況、アメリカ体育史における体育館の成立についての問題は今後の課題としたい。

注

- 1) それ以後の関連する研究として、『世界体育史』(今村嘉雄・石井トミ共訳、不昧堂、1952年、p 165-170)や『アメリカスポーツの文化史』(小田切毅一、不昧堂、1982年、p 112-115)などが挙げられる。これらは、ドイツ体操の導入経緯と活動を巡って、レオナルド前掲書の部分的な紹介を行ったものである。
- 2) ナンシー・グリーン『多民族の国アメリカ移民たちの歴史』、創元社、1997、p 20-21。ニューイングランドにおける初期の移民の流れについて整理をしておく。
まず1630年から40年代にかけてイギリスを逃れて来たピューリタン(清教徒)で、彼らはニューイングランドに入植し、かなり均質的な集団を形成した。2つめは南のハドソン川とデラウェア川の間に入植した、オランダの改革派、ドイツ(ラインラント・プファルツ)のクウェーカー教徒(1675年)、カルヴァン派プロテスタントであるフランスのユグノー(1680~90年)たちである。彼らはイギリスの入植者としてしばしば対立しながらも定着していった。3つめは、ヴァージニア及びメリーランドのチェサピーク植民地で、強制労働に基礎を置いたタバコ・プランテーションによる少数者支配体制を確立した人々だった。4つめは、ノース・カロライナとサウス・カロライナの広大な土地に17~18世紀に入植した、2万5000人のヨーロッパ人である。
- 3) Boston Public Library, "Outline of the Round Hill School", June-1831. Boston, From N. Hales' steam power press, pp24.
Library of Congress, "Life of Joseph Green Cogswell as sketched his Letters", 1874. pp364.
〃 〃 "Old and New-Some Souvenirs of Round Hill School", vol. VI, p27-41.
- 4) アメリカ国立医学図書館所蔵、「ボストン医学通信」、1826年10月24日記事には、
「(第一の問題について)女性のひ弱さや適性についての一般的観念といったものは、女性の虚弱性や無気力を救おうとするあらゆる試みに矛盾したものである。一例えば、飛び跳ねたり、荒々しい動作など忌み嫌われていることをやらせようとすると全く凝視した顔付きをするのです。(中略)私を駆り立てて、やっとのことで新しい体操用具と運動を考案できたからです。ま

た(第二の問題は)これまで力が弱かったり虚弱であった様な子供が少なくとも2倍も力強くなり、弱い子供には必要なことと考えられてきた少しばかりのわがままも、今では軽蔑の対象となっていることである。非常に無気力だった子供が生き生きとしてきたこと。元気のありすぎる子供が溢れるばかりの活気を無害の方法で沈静化するようになったこと。」などを導入する際の理由として挙げている。

- 5) Library of Congress, “American Journal of Education”, 1861. p607.
- 6) Massachusetts Historical Society, “John C. Warren Collection”, p223.
- 7) Harvard University, College papers, vol.XI, p. 82f.
Harvard University, // //
- 8) Erich Geldbach, “The Beginning of German Gymnastics in America”, 1976. p. 243-244.
- 9) Harvard University, College papers, vol. 1, p. 24f. & 33f.
cf. Erich Geldbach, “Turnvater Jahn-Harvard Professor?”, deutsches turnen, vol. 120, 1975. p350-353.
- 10) F. L. Follen (his wife), “The Life of Charles Follen”, 1844. p104-105.
- 11) Library of Congress, “Catalogue of the Officers and Students of the University of Cambridge”, 1825.
Library of Congress, “for the Academical year 1827-1828”, 1827.
 // // “The catalogues for 1828-1829, and 1829-1830”, 1828, 1829
- 12) Library of Congress, “The Life of John Collins Warren, M. D.”, 1871. P222.
- 13) Library of Congress, “American Journal of Education”, vol. 1, 1826. p443-445.
- 14) Sullivan William, “Gymnasium —The undersigned Committee, appointed to effect the establishment of a gymnastic school in Boston”, 1826. p1.
- 15) Library of Congress, “The Boston Gymnasium.”, 1827. 7. 10. p133-134.
- 16) Fred. Eugene Leonard, A. M., M. D. “A Guide to the History of Physical Education” 1923. p240-241.
- 17) Charles Beck, “A Treatise on Gymnasticks, taken chiefly from the German of F. L. Jahn”, 1828. pp. 173
- 18) Massachusetts Historical Society, “John C. Warren Collection”, p272.
- 19) American Institute of Instruction, “The Introductory Discourse and Lectures”, August 1830.
- 20) Massachusetts Historical Society, “John C. Warren Collection”, p224

「ボストンの体操学校設立から25年が経った。我々は、あえて次のような希望を述べてよいと思う。公的教育の指導者は、学校や大学教育の一環としての体操の重要性を知り、また、人生を活動的に、有益に、また楽しくするために不可欠な資質が社会の知識階級で低下しているという状況を理解すべきである。

我々の体操の授業に当初から参加している紳士たちの中で、4, 5人がかなり長い間続けており、残っているものは、これからも続けていくであろうということを、ここで付け加えておく。」とワレンは当時、体育実施の状況を述べている。

文中で引用した、「米国教育雑誌」は全て、米国議会図書館所蔵のものを、また「ボストン医学通信」は、米国国立医学図書館所蔵のものを引用した。